●6月選評

小島なお

・**深町　明（福岡県）**

「知り合いかも」の芋蔓に酔ふ

知り合いかもしれないし、知り合いじゃないかもしれない。無責任な関係性の芋蔓を張り巡らせることができるなら、たぶん世界中が私という芋に繋がる。

・**絵巻（東京都）**

かたばみの花平日の靴はこれ

気を抜いた平日の靴と、気を入れた休日の靴。特別な花じゃないかたばみの花は平日の靴の花だと思う。これ、と足元を指した先に、背の低い黄花が揺れる。

・**塩見　佯（沖縄県）**

天井を妹が這う夏の音

『変身』のグレゴール・ザムザにはたしか妹がいた。彼の場合は家族に見捨てられ死んでしまうが、この妹はむしろ命がみなぎっている感じがある。

・**大西　美優（広島県）**

三つ編みを辿ってゆけば山滴る

緑が山にあふれる夏の季語「山滴る」。三つ編みで束ねた髪をたどったさきには、夏山のような少女の頭部が。滴る髪の一本いっぽんに夏の全能感がつやめく。

・荒谷　玄（京都府）

最近は短い映画を観ています。
少しの間完璧でいたい

完璧であるのは一秒だってむずかしい。引き延ばされるほどにほころぶのは、人も映画もおそらく同じで、ひとときの完璧のあとは、長い不完全の実人生へ。

・千葉羅点（愛媛県）

飛行機の性別を知る面談日

仕事のこと、子どものこと。面談をせずにわからないままでいるのはこわいこと。飛行機のアイデンティティを知ることも世界を理解する一歩か。

・有野　水都（東京都）

レアチーズケーキの箱の半夏生

ケーキもケーキを入れた箱も白くて、その白さにはすずしい風が吹いている。白い葉のさざめく半夏生を想像し、七夕までの時節の半夏生のあかるさを思った。

・志内　悠真（京都府）

あれは俺が点けた電気　あっちは
勝手に点いていつまでも
光ってる電気

付けたり消したりできる電気とそうでない電気。そうでない電気には手を伸ばしても届かない。あっちの電気は街灯か、月か、原子力の焔か。

・小野寺　里穂（神奈川県）

きみが想像できるプリーツ
じゃない

私が想像できるのはせいぜい制服のスカートか、カーテンくらい。ここでいうプリーツはもっと繊細で唯一無二で、簡単に想像などできてはいけないのだ。

・桜望子（山形県）

階段を登る足が
絡まって動けなくなる
浜昼顔の群生の
上で踊っていたかった

海岸沿いの砂地に咲く浜昼顔。砂に埋め、砂に攫われる感触を足は覚えているのだろうか。どこか目的地のために使役することを、足が拒絶している。